

# 活魚コンテナを用いた活魚出荷

大島支庁 林務水産課

## 【背景・目的】

漁獲物の付加価値向上のため、離島航路を結ぶフェリーで運搬可能な活魚コンテナを用い、鹿児島・沖縄への活魚出荷を可能とする体制を構築する。

## 【普及の内容・特徴】

奄美漁業協同組合が平成20年度に整備した活魚コンテナ(容量1,500リットル1基)を用いて、鹿児島市場への活魚出荷を行い、これらに必要な至適条件、課題を検証する。

## 【成果・活用】

10～12月にかけて、鹿児島市中央卸売市場魚類市場への活魚出荷を3回実施した。鹿児島市場への活魚出荷による付加価値向上効果を、奄美漁業協同組合における通常の鮮魚出荷の単価と比較すると、活魚出荷により最大883円/kgの向上が見られた。しかしながら、魚種と出荷時期、輸送中の斃死により、110円/kgと単価を下げる例もあった。

奄美漁業協同組合から鹿児島市場で競りにかけられるまでの時間は42時間であった。その際、エアレーションは、酸素は7m<sup>3</sup>のボンベから毎分1.6～2リットルの流量で行ったが、容量上の問題はなかった。

活魚輸送の際、水温の上昇は危惧される要因の一つであるが、12月8日の出荷分について、出荷前に、海水を満たし冷凍した容量20リットルのポリタンク1つをコンテナ内に投入した例では、外気温が低かったためと思われるが、ほぼ21℃で安定していた。

また、これらの出荷に要した経費は、酸素ボンベ代も含め2～3万円であった。

## 【その他】

今回の活魚コンテナの使用に際して、次の課題を検討していく必要がある。

### 1 出荷体制の充実

活魚コンテナの効果を最大限発揮するためには、鹿児島 奄美間の単価の差が大きい水産物を出荷する必要がある。そのためには、価格差を大きくする魚種の把握、出荷までの間、複数種の魚を一定量までストックする体制が必要である。

また、競りまでの斃死を軽減するため、漁獲時の活魚の取り扱いを習熟する必要がある。

### 2 経費削減

今回の輸送に2～3万円の経費が生じている。このうち、酸素ボンベ代は、酸素流量、使用時間、輸送する魚の量等のデータを蓄積することで、現在使用している7m<sup>3</sup>のボンベ1本で2回出荷できる可能性が見込まれた。また、フェリーに積載している間は、外部電源によりブLOWERを使用すれば、さらに酸素ボンベ代は軽減できると考えられる。

## 活魚コンテナ概要

- ・FRP製 2 トラックに積載可能で、海水に耐え堅牢なもの
- ・本体外寸1680×1600×700H（足、ハッチを除く）
- ・底部 鉄板補強4.5t（立ち上げ200）
- ・保温材 POボード（30mm 非吸水性 6面とも）
- ・天蓋ハッチ（500×500） ・酸素ポンベ台（固定バンド付き）
- ・酸素調整器(活魚用流量計(10L/分)付・関西式)
- ・酸素分散器（カマボコ型・60cm，適正酸素量 5 L/分）
- ・底面濾過システム 配管 一式
- ・プロアポンプ（100V），エアストーン30cm 2 本，三方分岐
- ・観察窓（遮光可，2 箇所）

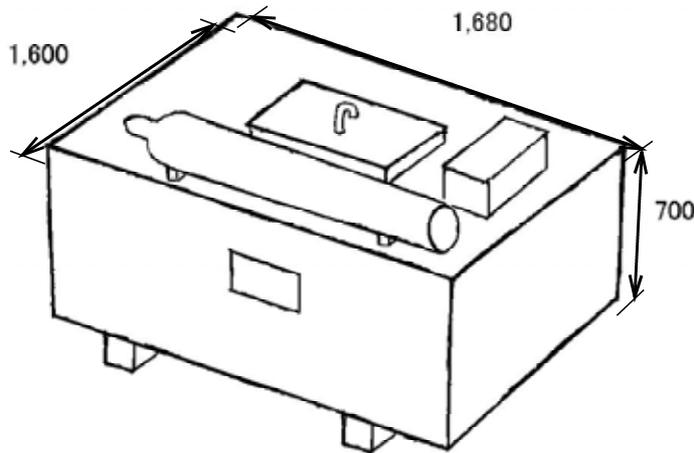


表 活魚出荷の結果

出荷日時	出荷量		魚種	生残率	販売価格 (円)	平均単価 差(円)	地元鮮魚販売 との差(円)
	尾数	量(kg)					
10月31日	10	32.3	カ, ア, ハ, ヨ	100%	43,093	883	23,143
11月30日	23	69.3	カ, ス, ネ, サ, ヨ, ア	74%	79,720	253	16,310
12月8日	16	83.8	カ	94%	54,510	-110	-4,150

カ;カンパチ, ア;アオチビキ, ハ;ハマフエフキ, ヨ;ヨコスジフエタイ, ス;スジアラ, ネ;ハタ類,  
サ;サザナミダイ

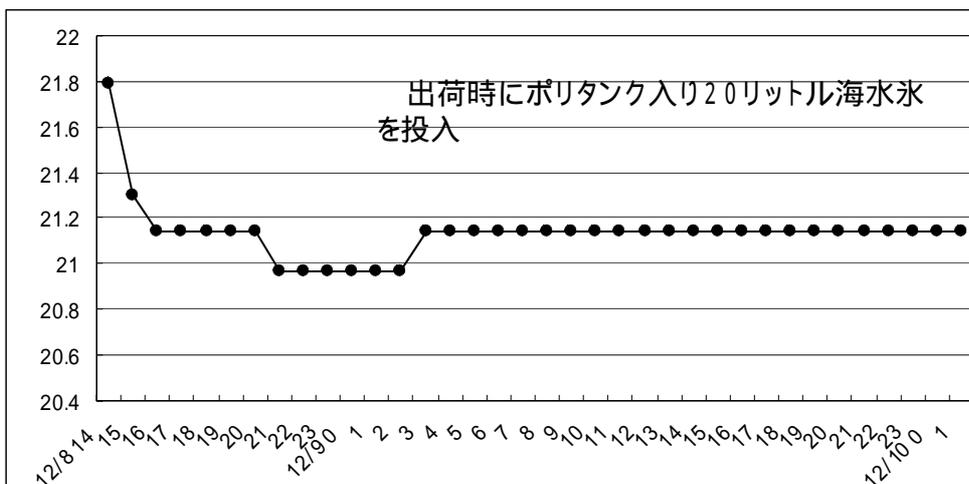


図 活魚タンク内の水温(12月8～10日)